

奨学金留学生事業 留学成果報告 (学部留学生)

当協会の奨学金留学生事業では、日本の大学で学ぶ台湾からの留学生を支援しています。学位を取得するまでの期間を支援する長期奨学金と、最長1年間の交換留学を支援する短期奨学金があります。

先月号に引き続き、今春卒業した長期奨学金留学生（学部留学生）の日本留学経験についてご紹介いたします。

1. 私の留学体験談

大阪大学 郭維昕

現在は、大阪大学を卒業し、台湾にて兵役に服すための準備をしています。卒業した今でも、度々学生生活の楽しい思い出を思い出します。本稿では、以下の3つの観点から私の留学体験談を語らせて頂きます。

- (1) 日本台湾交流協会の奨学金が具体的にどのように役立ったか
- (2) 4年間の留学生活で得たことを今後どのように活かしていきたいか
- (3) 学業・課外活動面における成果はなにか

まずは、日本台湾交流協会の奨学金が具体的にどのように役立ったかについて、以下の2点から述べます。1つ目は、経済的な余裕を持つことができたことです。そのため、自身が興味を抱く物事に没頭することができました。このことが、自分自身への「投資」に繋がると自負しています。具体的には、授業料を支払うために自身が興味のないアルバイトに従事する必要がなかったことです。そのため、学業に集中することができただけでなく、他学部の授業の聴講・履修に積極的に取り組むことができました。更に、学生時代には様々なことに挑戦したいという思いから、後述する新規事業立案コンテストに参加したり、2ヶ月間学

生代表として学長と共に国際フォーラムに参加するなど、自身のスキルアップに繋がる様々な経験を積むことができました。2つ目は、横の繋がりに加え、縦の繋がりを持つことができた点です。4年間の留学生活において、私は日本台湾交流協会奨学金生の交流会で知り合った友人・先輩方に様々な場面でご支援頂きました。具体的には、就職活動をし始めて間もない頃は、右も左も分からない状況だったのですが、先輩方は私のOBOG訪問を快諾してくださり、就職活動のコツを伝授して頂きました。コロナ禍において交流が難しい中、上記のように、似たようなバックグラウンドを持つ人々と繋がりを持つことができたことは、様々



国際交流サークルの友達と撮った卒業写真

な情報を得るためにも、更には精神的な負担が生じないようにするためにも非常に重要な出来事でした。

次に、4年間の留学生活で得たことを今後どのように活かしたいかについて、以下の2点から述べます。1つ目は、グローバルな環境に身を置くことで得られた「語学力」や「異文化理解力」を活かし、更なる日台の友好関係の促進に貢献していきたいということです。実際、大学においても上記の力を活かし、国際交流サークルの代表として日本人学生と外国人留学生の生活の「分断」を無くすための取り組みを頻繁に実行してきました。将来は、日台交流に重きを置き、就職先の会社の国際交流サークルにて交流イベントを開催するなど、民間レベルでの交流を更に推進する役割を果たしていきたいです。次に、2つ目は、留学生活の中で得られた「自ら積極的に思考・議論し、自分自身の観点を常に持つ」というマインドセットを活かし、コンサルタントとして企業ないし社会の課題を解決していきたいということです。大学時には、双方向的なコミュニケーションを通じて、自分自身の観点をもち、更はその意見を論理的に伝えることが重視された授業を積極的に受講してきました。その結果、これらの努力が功を奏し、上記で記したマインドセットを培うことができました。そこで、将来は、課題解決の専門家として、より一層豊かな社会の創出に貢献できるよう、自己研鑽に努める所存です。

また、学業・課外活動面の成果を、以下の2点

から報告します。1つ目は、「大阪大学学部学生による自主研究奨励事業」にて、研究費給付型研究事業として採択されたことです。当時、私たちのチームは、「環境意識が肉食主義に対する好感度を左右する」という仮説を構築し、700名へのアンケート調査、及び10名へのヒアリング調査を実施しました。そこで、得られたデータをR言語というプログラミング言語によって統計的手法から検証しました。この経験から、新しい知見を自ら生み出すということに強い達成感を感じました。2つ目は、半年間に亘って参加した、企業とSDGsをテーマとした新規事業立案コンテストにて学生3名で優勝したことです。私たちはユニークな提案を目指し、チームと共に新規事業を成立させるために必要なことを多様な側面から検討するよう心がけました。この経験を通して、他者と共に何かを成し遂げることに喜びを感じただけでなく、社会人との協働の中で、自身が日本での就職を検討する際の良い判断材料となった点において、この経験は私にとって非常に有意義な体験でした。

最後に、今回の留学にて、私が上記のような経験及び知識を身につけることができたのも、ひとえに多くの人々の支えがあったお陰です。日本台湾交流協会の方々、東京日本語教育センター及び大阪大学の先生方、留学中に出会えた仲間、家族にはこの場を借りて感謝申し上げます。今後は更に、私自身が周囲の人々を巻き込み、共に切磋琢磨し、成長し合える人間に成長することができるよう、尽力することをここに誓います。



名古屋にて自主研究の一環であるヒアリング調査を実施



新規事業立案コンテストで優勝
(左から審査員、学生、協力企業の社員)

2. 日本留学生生活を振り返って

学業の道を歩んでいくと、いつか卓球をやめなければならぬと思ったが、4年間の留学生生活を振り返ると、卓球部に関する思い出が満ちている。

他の留学生と比較してかなり単調な生活を送っていたかもしれない。体育会に入部したため、大学の生活はただただひたすら授業を受けて、そのあとに部活に行き卓球するという繰り返しだった。他校へ行って練習に参加したり、試合のために遠征したりすることもよくある。各遠征やオープン大会に参加するのは大金がかかったが、交流協会奨学金の支援があったから、自分は生活費に困ることなく、すべての時間を学校の授業と部活に使い、日本人の友達と深い文化交流ができた。

自分の背景を簡単に紹介する。台湾で小学校、中学校の時に「校隊」という、おそらく最も日本の部活に近い団体に所属し、毎日週5、2-3時間の練習をしていた。高校は台湾の進学校であり、ちゃんとした団体はなかったが、試合に近づくと卓球を練習し、学校を代表して出場していた。また、短い間だが台湾の大学で「乙組」という学校を代表する2番目のチームに所属し、台湾大学生の部活について簡単な認識を持っている。このような経験を持っている私は、日本に来て卓球を通じて日本人の学生と交流し、体育会と台湾の「校隊」との違いを感じつつ、体育会文化に魅了された。

あくまでも自分の感覚だが、日本の体育会は台湾の校隊より帰属感と団体感が強い。そしてスポーツに対する執着と情熱が強く、命をかけて練習して強くなりたいという人が多いと感じた。入学当初は他校で3時間くらいの練習試合をした後

に、先輩と同期に「さあ、帰るよ。5時にまた練習が始まるから。」と言われて、非常に印象に残った。疲れないの？ 3時間の試合の後にまた4時間の練習をして、卓球ってそんなに面白いの？ なんてそんなに一生懸命に練習するの？ と疑問を持っていたが、日本の試合を経験してわかってきた。

初めてレギュラーとして出場した1年生の私は驚いた。点数が取られたときにすべての部員から「ドンマイ!」、「大丈夫!」などの励ましの言葉をたくさんもらい、点数を取った際に全員の拍手と「おうおう!おうおう!おうおう!」の大きな掛け声が試合会場全体に響き、私の心を揺らした。たとえその時の私はあまり日本語を話せず、試合の戦術指導も8割以上聞き取れなくても、自分の後ろにはみんながいる、みんなと一緒に戦っていると初めて実感した。これまでは自分のために試合に出場してきた私は、いつのまにか全力を尽くしても、怪我しても頑張る部のために勝利を取りたくなり、体育会の色に染まった。

日本の体育会は、毎日の練習を通じて帰属意識が成り立っているが、練習が全てではない。毎日3、4時間の練習のあと、上級生のおごりで部員たちがアフターに行き、遅くまでいられない部員達とバイバイする。残った部員達は終電に乗れるギリギリの時間までずっと部室でだらだら。部室がまるで我が家のように、スマブラをする人、携



2019年秋リーグに出場した写真



一丸となって試合中の部員を応援する部活の様子

帯をいじる人、提出締め切り前日に授業のレポートを書く人が各自のことをしながらおしゃべりする。バレンタインやクリスマスなどの特別な日には、クリスマス料理大会やたこ焼きパーティなどを開く。この和気あいあいとした雰囲気は卒業した今の私にとって最も良い思い出だ。ただ試合で共に戦う戦友だけではなく、卓球以外一緒に楽しんだり、レポートや中間試験一緒に苦しんだりする学生生活の伴走者に出会えるのは、日本の部活でしかないと思った。

4年間の大学生活を振り返ると、学業とゼミ、通訳バイト、インターン、就職活動等にも力を入れてたくさん勉強になったが、体育会卓球部と関わる時間が最も長く、学びも最も多かった。部活で身につけたコミュニケーション能力、困難に向き合う際の心構え、目標達成するためのPDCA能力及び団体を引率する力等将来に活かせる力も

もちろん、部活とは何か、日本の子ども達の共通の思い出（お菓子や童話）や日本人が外国人・台湾人に関してどう思うかのような文化的な面についての理解が深まった。タピオカやジーパイ等のグルメをはじめ、台湾の景色、台湾人学校生活や文化についてもおしゃべりを通じて、部員たちに広められ、自分なりに日台交流のかけ橋の役割を果たしたのではないかと思う。4月から今まで大学と部活で学んだことを活かし、日台交流を深め、日本と台湾の良いところを世界に発信できる人になりたいと考える。

学業・課外活動面の成果、受賞について

2019七大戦女子下位トーナメント	優勝
2019三商大体育大会女子ダブルス	三位
2019東京農工大学学長杯争奪卓球大会	団体三位



部活後のアフター



学生寮で行ったクリスマス料理大会